

自己評価書と評価結果報告書の関係から見た
大学機関別認証評価の分析

An analysis of certified evaluation and accreditation of universities
by examining the relationship
between self-assessment reports and evaluation reports

渋井 進, 野田 文香, 田中 弥生, 野澤 庸則
SHIBUI Susumu, NODA Ayaka, TANAKA Yayoi, NOZAWA Tsunenori

1. はじめに	117
1.1 大学機関別認証評価と評価の検証の現状	117
1.2 大学評価・学位授与機構の大学機関別認証評価の概要	118
2. 方法	120
2.1 分析対象	120
2.2 分析手法	120
3. 結果と考察	121
3.1 基準レベルでの分析	121
3.1.1 自己評価書と評価結果報告書の比較	121
3.1.2 経年的な変化	122
3.2 観点レベルでの分析	125
3.2.1 基準3 教員及び教育支援者	125
3.2.2 基準4 学生の受入	126
3.2.3 基準5 教育方法及び内容	127
3.2.4 基準8 施設・設備	130
4. おわりに	131
謝辞	132
文献	132
参考資料	134
ABSTRACT	138

自己評価書と評価結果報告書の関係から見た 大学機関別認証評価の分析

渋井 進*, 野田 文香*, 田中 弥生*, 野澤 庸則**

要 旨

平成16年度から導入された、大学機関別認証評価制度の第1サイクルが終わろうとしている。評価システムを改善し、効果的、効率的な評価を設計する上で、行われた評価のデータから全体像を把握し、検証して行く事は必要不可欠なものであり、国内外で多くの取組がなされている。本稿では、大学機関別認証評価において、大学側が提出した自己評価結果と、評価機関の評価者が判断した評価結果の関係を分析する事により、評価における双方の判断の特性を明らかにすることを試みた。分析対象として、大学評価・学位授与機構が、平成17年度から平成21年度まで行った大学機関別認証評価の5年分のデータを用い、基準ごとに特記された「優れた点」と「改善を要する点」について、大学の自己評価結果（以下、自己評価結果）と機構の評価結果（以下、評価結果）について、比較、分析を行った。その結果、全体の数としては、大学の自己評価の方が「優れた点」、「改善を要する点」ともに多くとりあげており、「優れた点」と「改善を要する点」の指摘の割合は、機構のほうが「優れた点」の指摘の割合が多いという結果が得られた。「優れた点」と「改善を要する点」の指摘数は、基準の内容にもよるが、具体的な数値や明確な水準が示されている基準・観点により多くの指摘や記述がなされている。こうした結果から、評価分析の根拠となる指標やデータの充実が評価をより有益なものにするために重要であることが窺えるとともに、教育の質保証に本質的な定性的な観点の判断根拠の蓄積の必要性も示唆された。

キーワード

大学機関別認証評価, 優れた点, 改善を要する点, 自己評価書, 評価結果報告書

1. はじめに

1.1 大学機関別認証評価と評価の検証の現状

平成16年4月より、高等教育機関に対して、法令によって定められた認証評価制度が導入された。これは、教育研究等の総合的な状況について、政令で定める期間ごとに、文部科学大臣の認証を受けた者（認証評価機関）による評価を受けるように定められたものである[1]。「政令で定める期間」は、大学においては、学校教育法施行令[2]で7年以内と定められている。

認証評価制度の目的や導入の経緯については、多くの論文がありここでは他稿[3, 4, など]に

譲るが、制度的な目的があいまいである中で高等教育の質保証において重要な役割を果たすべく進化していくことが期待されている[5]。そのためにも基準を含めた評価システムをより実質的・効果的なものとなるように改善して行くことは必要不可欠である。大学機関別認証評価を行う文部科学大臣の認証を受けた評価機関は、大学基準協会、大学評価・学位授与機構、日本高等教育評価機構の3機関がある。大学基準協会では、内部の規定において、「全て基準は、大学の質的水準を高めていくために、絶えず見直しを図る。」と定めており[6]、これに基づき第2サイクルの基準等の改正が行われた。日本高等教育評価機構においては、

* 独立行政法人 大学評価・学位授与機構 評価研究部 准教授

** 独立行政法人 大学評価・学位授与機構 評価研究部 客員教授

平成17年度に行った評価について、平成18年度に改善検討委員会を組織し、基準の改訂を行った結果を公表している [7]。大学評価・学位授与機構は、評価を受けた大学及び、評価を行った評価者に対する評価の検証のためのアンケートを毎年行い、評価基準の改訂等を行い、その結果を公表している [8]。

このように、それぞれの機関で認証評価システムの改善のために、評価に関する基準等を中心とした検証がなされている。そこで用いられる主な方法は、アンケート調査と大学関係者および有識者から構成される評価委員会での議論である。この方法は、評価基準の改定、訪問調査の方法の改善等の、一定の効果を上げている有効な手法と言える。

しかし、質問紙を中心とした評価の検証は有効である一方、大学評価の場においては、その限界もあり、第1サイクルの評価が終わるにあたり、従来の検証方法に加え、別視点からの分析としての多面的な方法による検証を行っていく必要がある。質問紙法以外の検証については、評価に中心的に携わってきた評価担当者による評価の総括 [9] や、インタビュー調査による検討などが挙げられるが、評価担当者による総括は、経験に基づくものであり、長年評価を経験している評価担当者以外は検証ができないという人的資源の限界や、インタビュー調査は質問紙と同様に、回答に当たってのバイアスが生じることが挙げられる。

その他の方法として、評価報告書の記述内容を客観的に分析することから、評価の特性を可視化するアプローチがある。例として、イギリスでは英国高等教育質保証機構 (QAA) が、大学の機関別監査の検証をするに当たって、全ての評価結果報告書をテキスト化し、キーワード分析を行うテキストマイニング手法により、評価の正確性に関連するデータを分析している [10]。国内では、野澤ら [11] が、高等専門学校の機関別認証評価に関する評価結果報告書の中の、「優れた点」、および「改善を要する点」という、評価における特記事項の年度推移をもとに、認証評価の効果につい

て検証している。

本稿では、野澤ら [11] の研究手法に従って、大学評価・学位授与機構の行った、大学機関別認証評価における評価結果報告書に書かれた「優れた点」、および「改善を要する点」の分析を行った。認証評価を側面的・補助的立場から従事してきた立場から、その第3者的な立場を活用し、評価の特性を客観的なデータから可視化し、それをもとに、評価の傾向について、大学機関別認証評価に関して総括した先行研究 [9] 等を参考としつつ、可能な範囲で考察を加えた。データを分析するにあたり、本論文独自の視点として、評価結果報告書だけではなく、自己評価書の分析も行い、その差異を扱った。近年の研究では、大学評価のピア・レビューを可視化するにあたり、大学評価を、大学が自己評価書として表出した情報を、評価者が情報を抽出して判断を行うコミュニケーションの一形態と捉え、自己評価書と評価報告書の違いにおける法則性を探るアプローチが提案されている [12]。本研究でもそのような問題意識を持ちつつ、大学と評価者による、「優れた点」と「改善を要する点」の抽出の異同を探り、また認証評価第1サイクルの5年分のデータを分析する事により、それらの年度的な変化についても考察を行った。これにより、第1サイクルの評価を検証し、今後の評価を設計する上での一つの資料として提供する事が本稿の目的である。

なお、本稿のデータは筆者らの研究としての、公表されたデータの分析とそこからの客観的考察であり、大学評価・学位授与機構の評価に係る公式な見解を示すものではない。

1.2 大学評価・学位授与機構の大学機関別認証評価の概要

本論文では、大学評価・学位授与機構の行う大学機関別認証評価について扱った。それゆえ、以降の分析を理解する上での前提となる評価のシステムや、これまでの大学の受審状況について、簡潔に説明する¹。

大学評価・学位授与機構では大学機関別認証評

¹ なお、評価の詳細については、大学評価・学位授与機構がウェブページにて公開している、以下の内容は主として「大学機関別認証評価実施大綱」[13]をもとにまとめたものであり、詳細についてはそこから確認可能である。また、荻上 [9] の「17. 評価の実施体制と方法」でも、具体的な報告がなされている。

価の目的を,

- ① 大学機関別認証評価に関して, 機構が定める大学評価基準に基づいて, 大学を定期的に評価する事により, 大学の教育研究活動等の質を保証すること。
- ② 評価結果を各大学にフィードバックすることにより, 各大学の教育研究活動等の改善に役立てること。
- ③ 大学の教育研究活動等の状況を明らかにし, それを社会に示すことにより, 公共的な機関として大学が設置・運営されていることについて, 広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくこと。

と定めている。

評価のプロセスは, 以下の順になされる。

1. 大学における自己評価

大学が自己評価実施要項 [14] に従って自己評価を実施する。ここでは, 大学評価基準 [15] に従って, 大学の教育活動の状況を分析し, 記述する。また, 各大学の優れた点, 改善を要する点などを評価し, 記述する。

2. 機構における評価

評価基準ごとに, 自己評価の状況を踏まえ, 大学全体としてその基準を満たしているかどうかの判断を行い, 理由を明らかにする。基準を満たしている場合であっても, さらに改善の必要が認められる場合や, 基準を満たしているもののうち, その取組が優れていると判断される場合には, その旨の指摘を行う。その後, 基準を全て満たしているかによって, 機関としての大学が機構の大学評価基準を満たしているかどうかの結果を確定し, 公表する。評価は, 評価委員会の下に置かれた複数名の, 各分野の専門家及び有識者を評価者として組織される各評価部会が, 書面調査および訪問調査により実施する。

表1に評価基準の構成を基準レベルで示す。評価基準の下には, 基準ごとに, その内容を踏まえ教育活動等の状況を分析するための「基本的な観点」が設定されている。大学評価基準は平成19年度および, 平成21年度の評価に対応して, 基準の下にある「基本的な観点」の数の変更を伴う2回の改訂がなされており, それについても表に記した。

表2に, これまでに大学評価・学位授与機構により認証評価が実施された大学の, 年度別および

表1 評価基準の構成および, 年度別の基本的な観点の数

基準	内容	観点数 (H17-18)	観点数 (H19-20)	観点数 (H21)
基準1	大学の目的	5	5	3
基準2	教育研究組織 (実施体制)	9	7	7
基準3	教員及び教育支援者	10	10	9
基準4	学生の受入	6	6	6
基準5	教育内容及び方法	37	37	33
基準6	教育の成果	5	5	5
基準7	学生支援等	11	11	10
基準8	施設・設備	4	4	4
基準9	教育の質の向上及び改善のためのシステム	8	8	6
基準10	財務	7	7	7
基準11	管理運営	11	11	11

大学評価・学位授与機構が実施した大学機関別認証評価の評価基準および, その下に設けられていた基本的な観点の数を示す。

表2 年度別評価実施大学数

	国立	公立	私立	年度計
平成17年度	2	2		4
平成18年度	7	3		10
平成19年度	37		1	38
平成20年度	4	5	2	11
平成21年度	27	10		37
計	77	15	3	95

大学評価・学位授与機構の評価を受けた大学機関別認証評価の年度別, 国公立別の内訳を示す。

国公立別の内訳を示す。ここから、国公立大学を中心に評価が行われ、年度ごとの評価を行った大学数にばらつきがある事が見て取れる。

2. 方法

2.1 分析対象

大学評価・学位授与機構が平成17年度から平成21年度までに実施した大学機関別認証評価の5年分のデータを扱った。その中でも、大学が提出した自己評価書および、年度ごとに刊行されている「大学機関別認証評価結果報告」の中から各大学の評価結果報告書に該当する部分の、11の基準に対して記述されている、「優れた点」および「改善を要する点」を分析対象とした²。これらのデータは全て電子化されたファイルとして大学評価・学位授与機構のウェブサイトに公表されており[16]、そこから取得した。対象とした大学数は、表2に示した通りであり、受審した全ての大学のデータを用いた。

2.2 分析手法

分析においては、「優れた点」および「改善を要する点」の「基本的な観点」（以下、観点と記述）レベルでの個数を、集計の基となるデータとして算出した。

「優れた点」および「改善を要する点」は、自己評価書においても評価結果報告書においても、各基準の分析・評価結果の後に基準ごとに記述されている。基準によっては、自己評価および評価結果のいずれにおいても記述が無い場合もあった。また、いずれかのみが記述されている場合もあった。

以上のように、基準ごとに「優れた点」および「改善を要する点」が示されていたが、内容を分析するにあたって基準レベルでは、その内容が幅広い事もあり、より詳細な分析が必要である。そこで、「優れた点」および「改善を要する点」で記述されている内容と観点との関連付けを行った。すなわち、基準ごとに示されているそれぞれの内容が、基準の下のどの観点の内容に該当するかの結びつけの作業を、手動で行った。具体的には、以下の通りである。

ごく一部の大学の自己評価書（全体のうち2大学）の「優れた点」および「改善を要する点」の記述には観点名が文末に括弧書きしてある場合があったが、その他の大学の自己評価書および機構の評価結果報告書の「優れた点」および「改善を要する点」の記述には観点名の記載はされていなかった。そこで、基準ごとにまとめられて記載されている「優れた点」および「改善を要する点」の内容と自己評価および評価結果の本文中の基本的な観点ごとの記述を関連づける作業を行った。この際、多くの「優れた点」および「改善を要する点」に記載されている文章の句あるいは文節は、それと同じ記述が自己評価書および評価結果報告書の本文中の基本的な観点ごとの記述にも見られるので対応付けはほぼ一意的に行うことができるが、その件数については以下のように数えた。

評価結果報告書においては、「優れた点」、「改善を要する点」ともに、○の下で箇条書きがなされており、1段落に対して基本的に1観点に対して関連付けを行い、一件とした。しかし、ごく一部ではあるが全体に係って総括した内容や観点との関連付けが難しいものや、複数の観点にわたるものもあり、それらについては、観点との関連付けは行わず、その他として別途集計した。複数の観点に関連しているものについては、それぞれの観点で1件とした。

自己評価書においては、大学により記述の方法が様々であり集計は評価結果報告書より複雑になった。箇条書きで書いてある場合には、評価結果報告書と同様に数えた。箇条書きになっていない場合には、1段落につき基本的に1つの観点と数えるように作業を行った。その際にも、1つの文章が長く多数の観点について触れてある場合には、それぞれの観点で1件とした。

作業は大学評価に5年以上の経験を持つ教員1名および、3年の経験を持つ事務職員1名、および評価基準及び評価の内容について説明を受けることによりトレーニングされた心理学を専攻する大学院生1名、の計3名で行った。1データにつき2名が行い、教員1名は全てのデータに目を通した。

² 平成19年度からの3年間については、評価結果報告書に記述されている「更なる改善を要する点」についても予備的に検討したが、指摘件数が少ない事や他の2点と比べて通年での分析が可能ではないため、分析から除外した。

得られたデータについては, 本「研究ノート, 資料」で直接分析する基準 3, 4, 5, 8 は本文中に記載し, 残りの基準 1, 2, 6, 7, 9, 10, 11 については, 参考資料として末尾に添付した。

3. 結果と考察

3.1 基準レベルでの分析

まず, 全体的な傾向を把握するため, 11の基準レベルで「優れた点」, および「改善を要する点」の, 自己評価書および評価結果報告書における件数を年度ごとに集計し, 全体をまとめた傾向と, 5年間の経年的な変化について検討を行った。

3.1.1 自己評価書と評価結果報告書の比較

5年分の自己評価書, および評価結果報告書における, 「優れた点」および「改善を要する点」の個数を集計した結果を図1に示す。これを見ると, 基準4の「改善を要する点」, 基準5の「優れた点」で, 両者にあまり差がみられない傾向が見られるものの, 全体の傾向としては「優れた点」, 「改善を要する点」のいずれにおいても, 自己評

価の方の件数が有意に多いことがわかる(「優れた点」, $\chi^2 = 665.79, df = 1, p < .001$; 「改善を要する点」, $\chi^2 = 529.62, df = 1, p < .001$)。また, 図1の「改善を要する点」のグラフから「優れた点」と「改善を要する点」の記述の割合に関して, 自己評価と評価結果の間では大学の自己評価の方が, 評価結果と比べて「改善を要する点」を多く記述していることがわかる。

次に, 基準ごとの記述傾向の違いを見るために, 図1に示した基準ごとに分割して「優れた点」と「改善を要する点」の記述の割合に関して, 自己評価と評価結果の間で差があるかをクロス集計し, 独立性の χ^2 検定³を適用した。ただし, 基準1については評価結果の「改善を要する点」が1件であったこと, 基準10に関しては評価結果の「優れた点」が3件, 「改善を要する点」が0件であったことから, 分析から除外し, 他の9の基準について適用した。それにより, 自己評価と評価結果の間で, 優れた点と改善を要する点の指摘の割合にどのような差が見られるかを, 以下に探索的に分析する。その結果, 基準2 ($\chi^2 = 7.48, df = 1, p <$

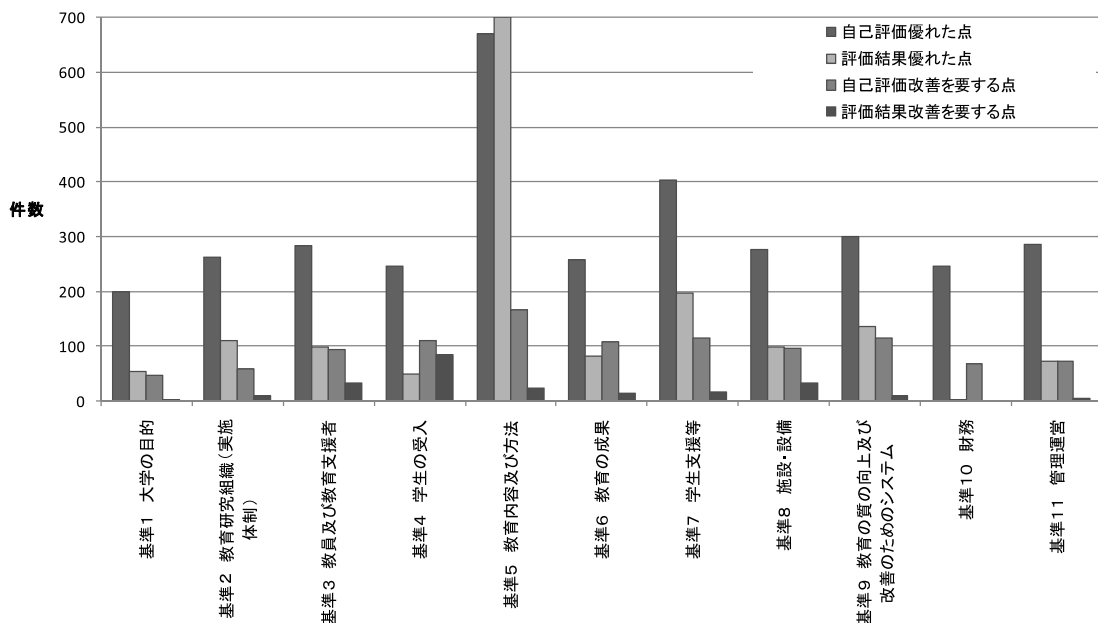


図1 基準ごとの優れた点, および改善を要する点

5年分の自己評価報告書, および評価結果報告書における, 優れた点および改善を要する点の件数を集計した結果を示す。横軸は基準, 縦軸は記述された件数を示す。

³ 以降の独立性のカイ二乗検定での帰無仮説は, 「自己評価と評価結果の間で, 優れた点と改善を要する点の指摘の割合に差がない」である。有意水準5%および, 1%で検定を行い, 帰無仮説が棄却された場合には差があると解釈して, その原因を考察した。

.01), 基準5 ($\chi^2 = 101.19, df = 1, p < .01$), 基準6 ($\chi^2 = 8.99, df = 1, p < .01$), 基準7 ($\chi^2 = 20.57, df = 1, p < .01$), 基準9 ($\chi^2 = 26.73, df = 1, p < .01$), 基準11 ($\chi^2 = 7.48, df = 1, p < .01$) に関しては, 有意差が見られ, 全体をまとめた場合と同様に, 大学の自己評価の方が, 評価結果と比べて「改善を要する点」を「優れた点」に比し, 多く記述していると解釈できる。

一方, 基準3 ($\chi^2 = .0007, df = 1, p = .98$) および, 基準8 ($\chi^2 = .088, df = 1, p = .77$) に関しては, 有意差が見られなかった。また, 基準4 ($\chi^2 = 38.21, df = 1, p < .01$) では有意差が見られたが, 全体の傾向とは異なり, 評価結果のほうが, 自己評価と比べて「改善を要する点」を「優れた点」に比し, 多く指摘している傾向が見られた。

以上をまとめると, 「優れた点」および「改善を要する点」の指摘の全体の件数としては, 自己評価のほうが, 評価結果よりも多い事がわかった。また, 「優れた点」および「改善を要する点」の記述の割合は, 全体としては, 大学の自己評価の方が, 評価結果と比べて「改善を要する点」を「優れた点」に比し, 多く記述していると解釈できた。しかし, 基準3および基準8に関しては有意差が見られず, また基準4においては差が見られたが, 自己評価よりも評価結果の「改善を要する点」の方が指摘の割合が多いという, 逆の傾向を示した。これらの理由については, いずれの場合も評価結果において「改善を要する点」の指摘件数が他の基準に比べ多い事が理由として推測される。なお, 検定を適用しなかったが, 基準1および基準10についても, 評価結果の「改善を要する点」が少ない傾向が見られ, 全体の傾向と同様と判断できる。評価結果において「改善を要する点」の個数に影響を及ぼした基準における要因について詳しく探るため, 3.2節の観点ごとの分析において, 基準3, 4, 8については, その内容に踏み込みつつ検討を行う。

3.1.2 経年的な変化

次に, 指摘件数について, 経年的な変化がある

かについて検討を行った。比較においては, 年度ごとに受審した大学数が異なるため, その年度の集計値を受審した大学数で除することによって, 1大学あたりの件数を算出し, 比較可能なものとした。年度間の比較において, 平成18年度と平成21年度に一部の観点が改訂され, その数も変化していることによる影響も考えられるが, 観点が変化しても, 他の基準に指摘内容が移る事はないと捉え, 基準レベルでの指摘はある程度一定であるとみなして比較を行った。それらの結果を「優れた点」と「改善を要する点」ごとに, それぞれ自己評価と評価結果の件数の推移を示す(図2 a-d)。

以上について, 年度間の違いを要因, 基準間の差を誤差要因として, 対応のある1元配置分散分析⁴を適用し, それぞれの影響があるかについて検討した。その際, 平成17年度については, 初年度である事, 受審校数が4校と少ない事を考慮し, 平成18年度から21年度までのデータを分析対象とした。

自己評価における, 「優れた点」の年度推移では, 年度の差については, $F(3,30) = 3.60, p < .05$ で効果が見られた。Scheffé法による多重比較の結果, 平成18年と21年の間に差が見られた(以下, 多重比較の手法は全てScheffé法を用いた)。

評価結果における, 「優れた点」の年度推移では, 年度の差については, $F(3,30) = .75, p = .53$ で効果が見られなかった。

自己評価における, 「改善を要する点」の年度推移では, 年度の差については, $F(3,30) = 5.66, p < .01$ で効果が見られた。多重比較の結果, 平成18年と19年の間に差が見られた。

評価結果における, 「改善を要する点」の年度推移では, 年度の差については, $F(3,30) = 1.48, p = .24$ で効果が見られなかった。

以上をまとめて考察を行う。自己評価においては年度の違いの効果があつた一方で, 評価結果においては見られなかった。自己評価における年度間のどこに差があるかを示す多重比較の結果は, 「優れた点」は18年から21年で増加, 「改善を要する点」は18年から19年で減少したことを示している。

⁴ 以降の分散分析での帰無仮説は, 「年度間の違いで指摘数の違いはない」である。有意水準5%および, 1%で検定を行い, 帰無仮説が棄却された場合には違いがあると解釈して, 水準内のどこに差があるかを特定するために, 多重比較を行った。

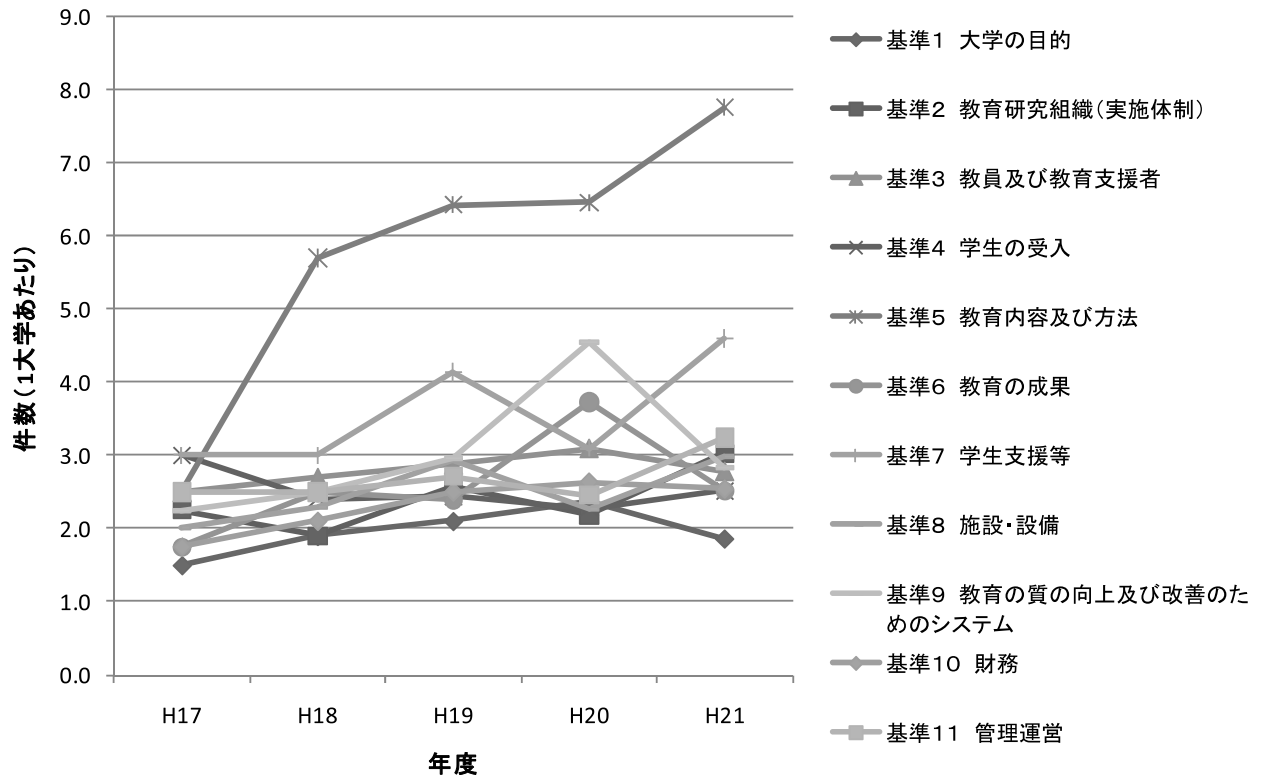


図 2-a 自己評価における、「優れた点」の年度推移

5年分の自己評価書における、基準ごとの優れた点の件数の推移を示す。横軸は年度、縦軸は1大学あたりの優れた点の件数を示す。

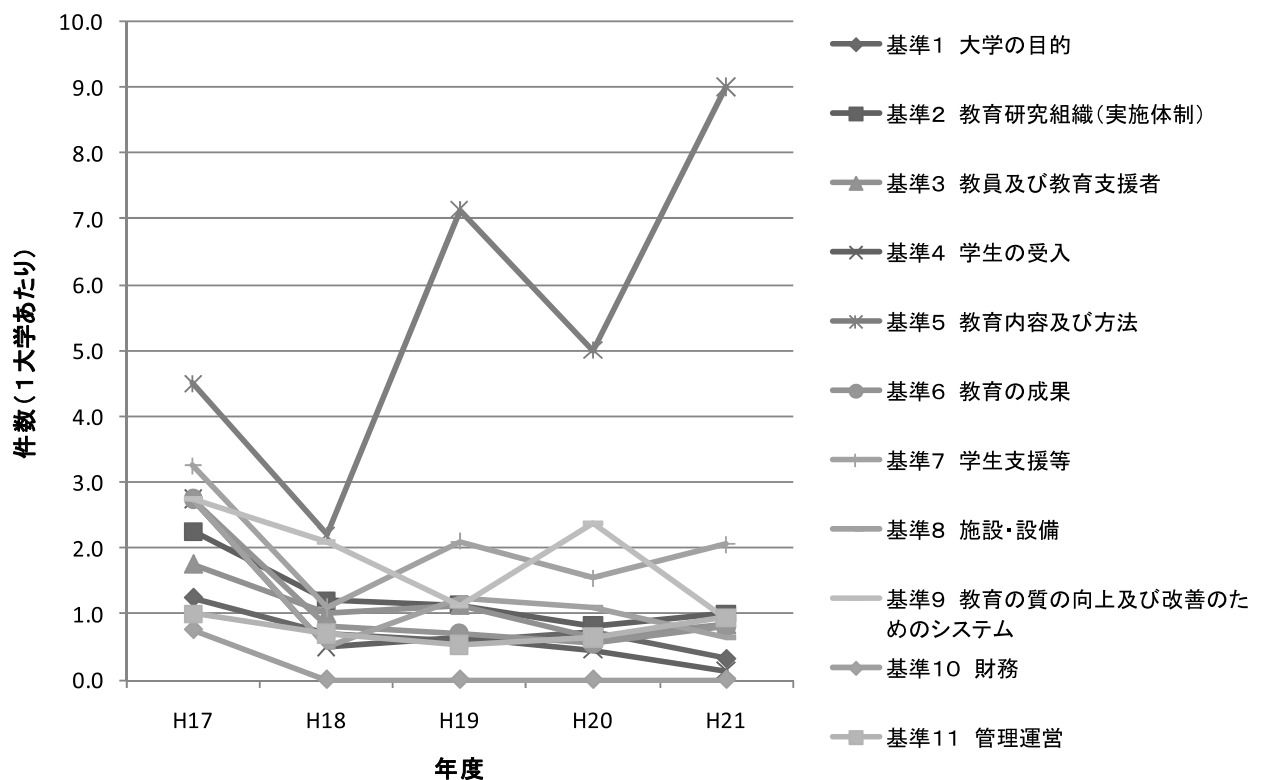


図 2-b 評価結果における、「優れた点」の年度推移

5年分の評価結果報告書における、基準ごとの優れた点の件数の推移を示す。

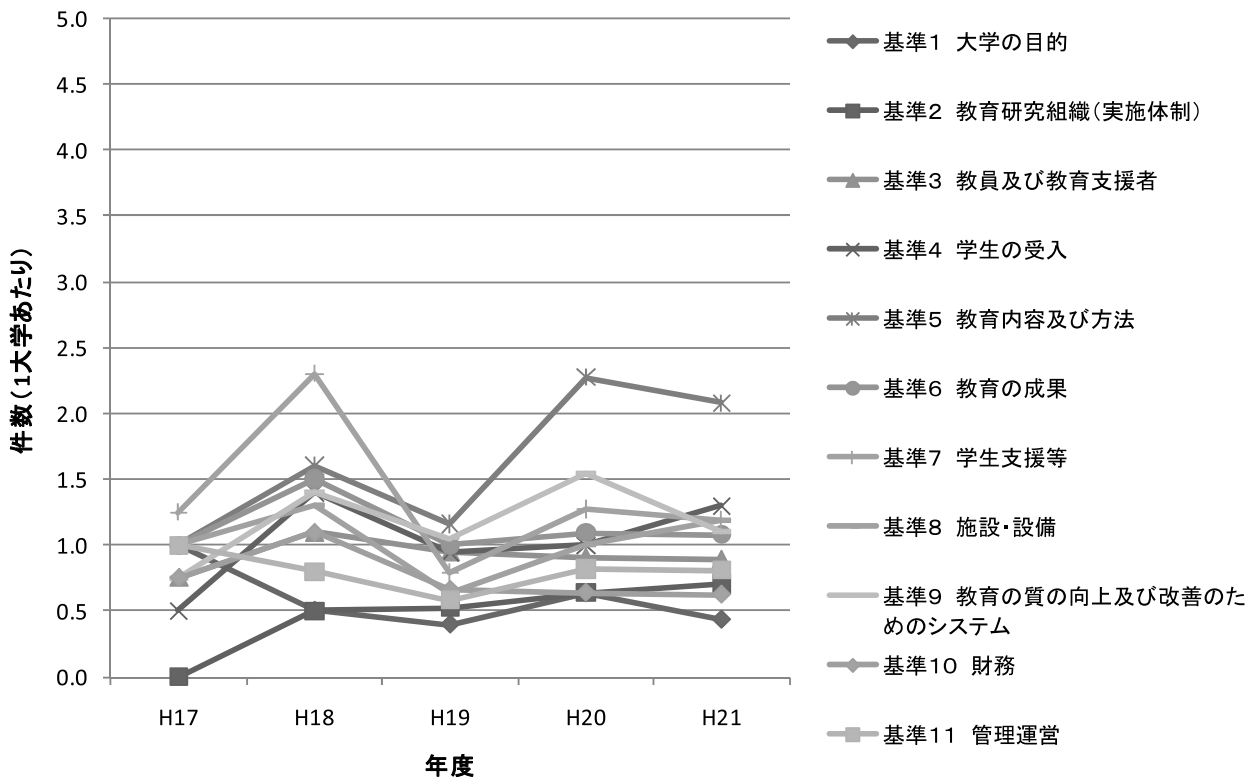


図 2-c 自己評価における、「改善を要する点」の年度推移
5年分の自己評価書における、基準ごとの改善を要する点の件数の推移を示す。

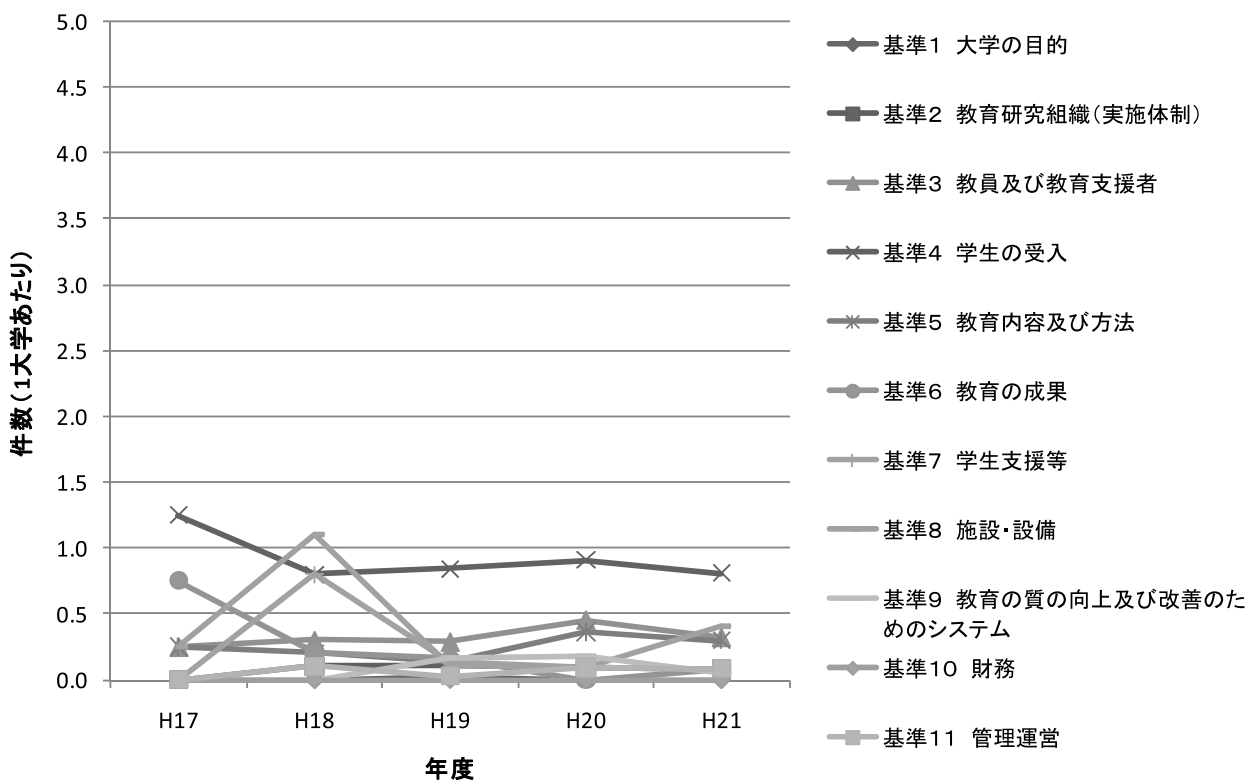


図 2-d 評価結果における、「改善を要する点」の年度推移
5年分の評価結果報告書における、基準ごとの改善を要する点の件数の推移を示す。

この事から積極的な解釈を行うと、「優れた点」については、荻上 [9] が、積極的に大学に記述を依頼した旨が報告されており、それにより記述数が増大したことを示した結果であると考えられる。「改善を要する点」についても、平成19年度で減少はしているが、その後一定レベルの数を示していることから一定数に落ち着いたと見て取れる。これは、荻上 [9] における報告と整合的な結果である。そこでは、「当初は『改善を要する点』 = 『悪い点』という印象を強く持たれ、どの大学も「改善を要する点」を記述することに躊躇いを感じた様に見えるが、『改善を要する点をきちんと把握し、それに対応を考えているとすれば、それは高く評価されます。』と言い続けた結果、自己評価を積極的にするようになってきた」という旨の記述があり、このデータの変動は、説明会等で、大学評価・学位授与機構が大学に質の改善を主体的・自律的に行う様に求めた結果が反映されたことを示している可能性がある。

しかしながら、消極的な解釈の可能性を示す要因もある。1つとして、いずれも18年度との間で差が見られたという事で、評価制度に大学が慣れていない事から起きた変動および、18年度を受審大学数が10大学と少ない事から起きた偶然の差である可能性が考えられる。もう1つとして、自己評価では、その年度に受ける大学の規模や特徴が一定ではなく、それによる潜在的な影響が表面的な差として反映された可能性がある。また、これらの影響が前にあげた積極的な解釈と複合している可能性もある。さらには、基準5の大きな変化の影響も否定できない。

その一方で、評価結果では年度の違いの効果が見られなかったことは、年度ごとに書き手である大学が変わる自己評価書とは異なり、評価委員会では一定の判断基準を保ちつつ、4年間を通して判断していることを反映していると考察できる。

3.2 観点レベルでの分析

以下では、評価結果において改善を要する点の指摘が多く、また、特徴的な傾向が見られた基準3, 4, 8について、さらに、「大学教育の質保証

を行う上で根幹的な部分」とされている基準5について、個々の基準ごとに「優れた点」および、「改善を要する点」の、自己評価および、評価結果に記述された件数を観点レベルで年度別に示す事により、どのような傾向があったかを考察する⁵。

3.2.1 基準3 教員及び教育支援者

表3-aに、観点ごとの件数の詳細について示す。これを見ると、「優れた点」については、観点3-1-⑥(平成21年度では3-1-⑤に対応)の「大学の目的に応じて、教員組織の活動をより活性化するための適切な措置が講じられているか。」において、男女共同参画への積極的取り組みやテニュアトラック制などの若手研究者支援のための取り組みに、また、観点3-2-②の「教員の教育活動に関する定期的な評価が行われているか。また、その結果把握された事項に対して適切な取組がなされているか。」において、教員の教育活動等の評価を研究費配分や処遇に反映につなげる取り組みに自己評価および評価結果ともに多くの件数がみられ、両者の取りあげ方の数的傾向に大きな差は見られない。

一方「改善を要する点」には、自己評価では「優れた点」と同様に、3-1-⑥および3-2-②に多くの記述が見られるのに対して、評価結果では3-1-④(平成21年度では3-1-③に対応)の「大学院課程(専門職大学院課程を除く)において、必要な研究指導教員及び研究指導補助教員が確保されているか」について多くの指摘が見られた。ここでの指摘内容は、大学設置基準を満たしているかどうかということと関連している。具体的には、教育学研究科の教科教育専攻等について、その下の専修において、設置基準違反ではないが、教育研究の目的を達成する上で支障がある事を指摘し、改善を求めたものが大半である。荻上 [12] は、「必要とされる教員数」について、「大学設置基準においては数少ない定量的な規定」と指摘し「『教員数が大学設置基準を満たしていない』事例は、『改善を要する点』の最たるものである。」と報告している。この観点における評価結果では、評価においても数値的な基準がチェックされ、そ

⁵ 平成21年度の改訂で、観点数の変更以外にも、細かな表現等が修正された部分があるが、基本的には同一の観点とみなせるものであった。よって、以下の観点の説明では平成21年度の観点を引用して記述した。

表3-a 優れた点および、改善を要する点の、
自己評価および、評価結果に記述された件数（基準3）

優れた点

観点番号	自己評価						評価結果					
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
3-1-①	3	5	15	8	5		1	1	2	1	2	
3-1-②	1	2	21	3	11		0	0	1	0	0	
3-1-③	0	3	3	0	9		0	0	0	0	0	
3-1-④	0	0	2	0	1		1	0	0	0	0	
3-1-⑤	0	0	1	0	37		0	0	0	0	16	
3-1-⑥	3	8	26	8			3	4	15	4		
3-2-①	20	0	1	9	5	5	5	0	1	4	0	0
3-2-②	54	2	4	17	5	26	33	1	4	15	2	11
3-3-①	13	0	0	7	3	3	3	0	0	2	0	1
3-4-①	17	1	3	8	1	4	6	1	0	4	0	1
その他	4		1		1	2						
合計	283	10	27	109	34	103	98	7	10	43	7	31

改善を要する点

観点番号	自己評価						評価結果					
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
3-1-①	0	1	1	0	2		0	0	0	0	1	
3-1-②	1	0	3	1	2		0	0	1	1	1	
3-1-③	0	0	0	0	7		0	0	0	0	9	
3-1-④	0	2	5	1	1		0	2	8	1	0	
3-1-⑤	0	0	0	0	8		0	0	0	0	0	
3-1-⑥	1	4	15	4			0	0	1	1		
3-2-①	2	1	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0
3-2-②	21	0	2	8	2	9	3	0	1	0	1	1
3-3-①	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
3-4-①	10	0	1	3	2	4	2	1	0	1	0	0
合計	93	3	11	36	10	33	32	1	3	11	5	12

平成17年度から平成21年度までの、自己評価書および、評価結果報告書に記述された優れた点および改善を要する点の件数を示す。上の表は優れた点、下の表は改善を要する点を示す。各観点に結びつけが難しいものがあった場合、「その他」としてカウントした。平成21年度の基準の変更で、その年に設定がなかった観点については、斜線を記入した。平成21年の変更により、それまでの、基準3-1-②および、3-1-③を合わせた内容が3-1-②に統合され、その後の番号が繰り上がっている部分があるため、観点ごとの合計欄は一部空欄としている。以降の表3-b、3-c、3-dについても、同様の手続きで集計した結果を示す。

れに照らし合わせた評価が行われた結果、「改善を要する点」として多く指摘されたと言える。

3.2.2 基準4 学生の受入

表3-bに、観点ごとの件数の詳細について示す。これを見ると、「優れた点」については、観点4-1-①の、「教育の目的に沿って、求める学生像及び、入学者選抜の基本方針などの入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められ、公表、周知されているか。」において、進学説明会、オープンキャンパス等でのアドミッション・ポリ

シーの積極的な公表、周知の取り組みに、また、観点4-2-①の「入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）に沿って適切な学生の受入方法が採用されており、実質的に機能しているか。」において、スーパーサイエンス特別選抜など高大連携特別選抜、医学部での学力のみでなく態度・習慣領域評価を取り入れたアドミッション・ポリシーに沿った多様な入学者選抜に、そして、観点4-2-④の「入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）に沿った学生の受入が実際に行われているかどうかを検証するための取組が行われており、その結果を入

表 3-b 優れた点および、改善を要する点の、自己評価および、評価結果に記述された件数（基準 4）

優れた点

観点番号	自己評価						評価結果					
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
4-1-①	68	4	7	28	7	22	14	3	0	7	2	2
4-2-①	64	4	5	24	3	28	17	5	3	7	1	1
4-2-②	22	0	2	8	4	8	3	1	0	1	0	1
4-2-③	32	2	4	9	3	14	4	1	1	2	0	0
4-2-④	45	1	5	18	4	17	12	1	1	7	2	1
4-3-①	15	1	1	6	4	3	0	0	0	0	0	0
その他	1					1						
合計	247	12	24	93	25	93	50	11	5	24	5	5

改善を要する点

観点番号	自己評価						評価結果					
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
4-1-①	15	1	2	4	1	7	0	0	0	0	0	0
4-2-①	4	0	0	2	0	2	1	0	0	0	1	0
4-2-②	2	0	2	0	0	0	1	1	0	0	0	0
4-2-③	4	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0
4-2-④	16	0	3	4	2	7	0	0	0	0	0	0
4-3-①	67	1	7	25	5	29	79	0	8	32	9	30
その他	3			1	2							
合計	111	2	14	36	11	48	81	1	8	32	10	30

学者選抜の改善に役立てているか。」において、一般入試，推薦選抜，AO 入試等の入試区分毎の追跡調査を詳細に実施しこれを入試方法の改善に役立てている取り組み等に，自己評価および評価結果ともに多くの件数がみられ，両者の取りあげ方の数的傾向に大きな差は見られない。

「改善を要する点」については，自己評価も評価結果も，4-3-①の「実入学者数が，入学定員を大幅に超える，又は大幅に下回る状況になっていないか。また，その場合には，これを改善するための取組が行われるなど，入学定員と実入学者数との関係の適正化が図られているか。」において，自己評価も評価結果も多くの件数が取りあげられている。ここでは，いずれにおいても定員充足率が低い，あるいは定員超過率が高い点を指摘している。これらの指摘は特に入学定員の少ない編入学選抜や大学院課程の一部の研究科に多く指摘がなされている。荻上 [12] は，「入学定員と実入学者数の関係については，1.3倍を超える，又は0.7倍

を下回る状況があれば指摘することになっている」と指摘しており，数値基準に基づいてチェックされ，それに照らし合わせた評価が行われた結果，改善を求める点として多く指摘されたと言える。この基準は，「優れた点」に対する「改善を要する点」の指摘の比率が評価結果の方が多かった唯一の項目であるが，指摘数を見る限り，評価結果の方が多くはあるが，大学の自己評価においても「改善を要する点」として挙げられている事がわかる。

3.2.3 基準 5 教育方法及び内容

表 3-c に，観点ごとの件数の詳細について示す。本基準では，学士課程，大学院課程，専門職学位課程についてそれぞれ基準・観点が設けられている。

表 3-c (1)，(2)，(3) を見ると自己評価報告書で「優れた点」の観点ごとの指摘については，いずれの課程もほぼ同様な結果となっている。すなわち，指摘の多い観点は，学士課程での観点5-1-

表3-c(1) 優れた点および、改善を要する点の、
自己評価および、評価結果に記述された件数 (基準5 学士課程)

優れた点

観点番号	自己評価					評価結果						
	指摘数 合計	推移				指摘数 合計	推移					
		17年度	18年度	19年度	20年度		21年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
5-1-①		1	8	21	4	33		3	2	9	1	11
5-1-②		1	5	9	6	48		1	1	9	6	102
5-1-③		1	0	6	3	11		0	1	3	0	9
5-1-④		1	5	38	10	/		2	5	78	9	/
5-1-⑤		0	2	12	3	/		1	0	10	2	/
5-1-⑥		0	0	3	0	/		0	0	0	0	/
5-2-①	62	0	7	24	8	23	74	3	2	29	7	33
5-2-②	24	0	2	13	2	7	6	0	1	2	1	2
5-2-③	33	0	1	14	3	15	14	0	2	4	2	6
5-2-④		0	0	1	0	0		0	0	0	0	0
5-2-⑤		/	/	/	/	0		/	/	/	/	0
5-3-①		0	1	2	2	6		0	0	0	0	2
5-3-②		0	3	0	1	2		0	0	0	0	0
5-3-③		0	0	2	0	/		0	0	0	0	/
合計	370	4	34	145	42	145	361	10	14	144	28	165

改善を要する点

観点番号	自己評価					評価結果						
	指摘数 合計	推移				指摘数 合計	推移					
		17年度	18年度	19年度	20年度		21年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
5-1-①		0	0	0	1	0		0	0	0	0	0
5-1-②		0	0	0	0	4		0	0	0	0	1
5-1-③		1	0	0	0	3		0	0	0	0	0
5-1-④		0	0	1	2	/		0	0	0	0	/
5-1-⑤		0	2	8	0	/		0	0	1	0	/
5-1-⑥		0	0	0	0	/		0	0	0	0	/
5-2-①	3	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0
5-2-②	15	0	2	8	0	5	7	0	0	1	1	5
5-2-③	9	0	1	3	1	4	0	0	0	0	0	0
5-2-④		0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
5-2-⑤		/	/	/	/	0		/	/	/	/	0
5-3-①		0	1	1	2	5		0	0	0	0	0
5-3-②		0	2	1	0	7		0	0	0	0	0
5-3-③		2	1	5	3	/		1	0	1	1	/
合計	79	3	9	28	9	30	12	1	0	3	2	6

①に対応する大学院課程の5-4-②、そして、専門職学位課程の5-8-①の教育課程の体系性について、また、学士課程の観点5-1-④(平成21年度では5-1-②)に対応する大学院課程の観点5-4-②、専門職学位課程の5-8-②の学生のニーズ、学術の発展動向、社会からの要請に対応した教育課程や授業内容への配慮、さらには、学士課程の観点5-2-①に対応する大学院課程の観点5-5-①、専門職学位課

程の観点5-10-①の学習指導方法の工夫に多くの優れた点が指摘されている。評価結果の優れた点についても同じ観点群に指摘が多いが、この中でも、教育課程の体系性については指摘が自己評価に比べ少ない。

改善を要する点については、学士課程の観点5-2-②、大学院課程の観点5-5-②のシラバスについて自己評価書および評価結果とも指摘が多くなって

表 3-c (2) 優れた点および、改善を要する点の、
自己評価および、評価結果に記述された件数 (基準 5 大学院課程)

優れた点

観点番号	自己評価					評価結果						
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
5-4-①		2	5	22	8	12		2	0	12	6	9
5-4-②		1	2	6	2	39		1	2	3	0	95
5-4-③		1	1	2	4	3		0	1	12	1	1
5-4-④		0	0	4	0			1	0	2	0	
5-4-⑤		0	3	6	1			0	0	3	1	
5-5-①	43	1	3	19	6	14	98	2	0	60	10	26
5-5-②	8	0	1	2	0	5	4	0	0	0	0	4
5-5-③		0	0	0	0	4		0	0	0	0	1
5-5-④						0						0
5-6-①	15	1	2	5	1	6	9	2	1	3	1	2
5-6-②	16	0	1	7	1	7	7	0	1	6	0	0
5-6-③	6	0	2	3	1	0	1	0	1	0	0	0
5-7-①		0	0	1	0	2		0	0	0	0	0
5-7-②		0	0	1	1	4		0	0	0	1	0
5-7-③		0	0	2	1	0		0	0	0	0	0
5-7-④		0	0	1	0			0	0	0	0	
合計	229	6	20	81	26	96	273	8	6	101	20	138

改善を要する点

観点番号	自己評価					評価結果						
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
5-4-①		0	0	4	2	4		0	0	0	0	0
5-4-②		0	0	0	1	3		0	0	0	0	0
5-4-③		0	0	0	1	2		0	0	0	0	0
5-4-④		0	0	0	0			0	0	0	0	
5-4-⑤		0	0	0	0			0	0	0	0	
5-5-①	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
5-5-②	16	1	2	5	0	8	7	1	1	1	1	3
5-5-③		0	0	0	0	0		0	0	0	0	0
5-5-④						0						0
5-6-①	4	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0
5-6-②	5	0	1	2	2	0	2	0	0	1	1	0
5-6-③	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
5-7-①		0	0	0	2	3		0	0	0	0	0
5-7-②		0	0	0	0	3		0	0	0	0	2
5-7-③		0	0	0	2	5		0	0	0	0	0
5-7-④		0	1	0	1			0	0	0	0	
合計	62	1	4	13	13	31	11	1	1	2	2	5

いるが、優れた点に比べるとそれほど指摘数は多くはなく、特に評価結果においては指摘数は極めて少ない。

学生のニーズ、学術の発展動向、社会からの要請に対応した教育課程や授業内容への配慮には、GPに多く取り上げられている他学部や他大学との単位互換制度、インターンシップに対する単位

設定などが挙げられ、学習指導方法の工夫については、少人数教育、対話・討論型授業、情報機器の活用、TAの活用などが挙げられている。

これらの結果は、教育課程の体系的性、シラバス、学習指導方法の工夫において、資料や事例が具体的に判断基準が明確に出来る観点に指摘が集まっていることを示している。

表 3-c (3) 優れた点および、改善を要する点の、
自己評価および、評価結果に記述された件数 (基準 5 専門職学位課程)

優れた点

観点番号	自己評価					評価結果						
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
5-8-①		/	1	4	0	9		/	0	0	0	2
5-8-②		/	0	1	0	12		/	0	0	1	17
5-8-③		/	0	1	0	2		/	0	1	1	1
5-8-④		/	1	1	0	/		/	1	0	1	/
5-8-⑤		/	0	1	0	/		/	0	0	0	/
5-9-①	8	/	0	2	2	4	7	/	0	4	2	1
5-10-①	12	/	1	5	1	5	25	/	1	19	2	3
5-10-②	3	/	0	0	0	3	3	/	0	1	0	2
5-10-③		/	0	0	0	0		/	0	0	0	0
5-10-④		/	/	/	/	0		/	/	/	/	0
5-11-①		/	0	2	0	6		/	0	0	0	2
5-11-②		/	0	0	0	2		/	0	0	0	1
5-11-③		/	0	1	0	/		/	0	0	0	/
その他	3					3	2			1		1
合計	70	0	3	18	3	46	65	0	2	26	7	30

改善を要する点

観点番号	自己評価					
	指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
5-8-①		/	0	0	0	2
5-8-②		/	0	0	0	4
5-8-③		/	0	0	0	0
5-8-④		/	0	0	0	/
5-8-⑤		/	0	0	0	/
5-9-①	1	/	0	0	0	1
5-10-①	2	/	0	0	0	2
5-10-②	0	/	0	0	0	0
5-10-③		/	0	0	0	0
5-10-④		/	/	/	/	0
5-11-①		/	0	0	0	2
5-11-②		/	0	0	0	1
5-11-③		/	0	0	0	/
その他	13		3	3	3	4
合計	25	0	3	3	3	16

専門職学位課程については、評価結果の改善を要する点が通年で1件もなかったもので、省略している。

3.2.4 基準 8 施設・設備

表 3-d に、観点ごとの件数の詳細について示す。これを見ると、「優れた点」については、観点8-1-①の、「大学において編成された教育研究組織の運営及び教育課程の実現にふさわしい施設・設備が整備され、有効に活用されているか。また、施設・設備のバリアフリー化への配慮がなされているか」、観点8-1-②の「大学において編成された教

育課程の遂行に必要な ICT 環境が整備され、有効に活用されているか。」、および、観点8-2-①の「図書館が整備され、図書、学術雑誌、視聴覚資料その他の教育研究上必要な資料が系統的に収集、整理されており、有効に活用されているか。」において、自己評価および評価結果ともに多くの件数がみられ、両者の取りあげ方の数的傾向に大きな差は見られない。

表 3-d 優れた点および, 改善を要する点の, 自己評価および, 評価結果に記述された件数 (基準 8)

優れた点

観点番号	自己評価						評価結果					
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
8-1-①	92	4	10	38	6	34	32	6	3	15	4	4
8-1-②	86	4	6	33	7	36	22	4	1	8	2	7
8-1-③	11	0	2	3	2	4	5	0	1	1	2	1
8-2-①	88	0	5	37	10	36	40	1	0	23	4	12
合計	277	8	23	111	25	110	99	11	5	47	12	24

改善を要する点

観点番号	自己評価						評価結果					
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
8-1-①	54	2	8	18	8	18	15	1	4	2	1	7
8-1-②	14	1	4	1	1	7	2	0	2	0	0	0
8-1-③	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
8-2-①	27	1	1	5	2	18	15	0	5	2	0	8
合計	96	4	13	24	11	44	32	1	11	4	1	15

「改善を要する点」についても, 自己評価も評価結果も観点8-1-①, および観点8-2-①に多くの件数が見られる。内容としては, 8-1-①では, 自己評価では, バリアフリーへの対応および, 施設の老朽化への対応等が中心的に挙げられ, 評価結果ではバリアフリーへの対応の指摘が多く見られる。8-2-①では自己評価では図書館設備の充実や, 電子ジャーナルの整備等が多く挙げられ, 評価結果では, 図書館設備の充実が多く指摘されている。以上のように, 自己評価の方がやや幅広いものの, 評価結果と一致している事がわかる。

この事から, 基準 8 において「改善を要する点」の評価結果における指摘が多かった事の解釈の 1 つとして, バリアフリー, 図書館の充実に関して, 不十分な点が多かった, という解釈が可能である。その他には, 教育内容等の可視的な把握が難しい内容と異なり, その状況の把握が客観的に把握し易いものであるということも影響している可能性がある。その点では, 基準 3 の教員数, 基準 4 の定員充足率と同様の性質を持っていると言える。

4. おわりに

以上のように, 自己評価と評価結果の関係から, 評価の傾向が明らかになった。まとめると, 以下

の 2 点となる。

①全体として, 大学の自己評価の方が, 「優れた点」及び「改善を要する点」についての指摘件数が多い。

②全体として, 自己評価と評価結果における「優れた点」, 「改善を要する点」の比率は異なり, 評価結果のほうが「改善を要する点」の指摘数が少ない。しかし, 基準 3, 4, 8 においては「改善を要する点」も評価結果において多く指摘されており, そこにおいては, 客観的に把握しやすい指標や, 設備の整備等の具体的に把握可能な事象に基づいた判断が行われている。

これをもとに, 今後の評価に向けての考察を行う。まず, ①については, 現在行われている大学評価が, 大学による自己評価書の提出と, その情報をもとに評価者が作業をする流れになっている点で, 大学からは多くの情報が呈示されている状況が望ましいと言える。荻上 [9] は「評価結果が質の改善に結びつくように、『優れた点』, 『改善を要する点』, 『更なる向上が期待される点』を積極的に指摘することにより, 大学の特色を明確にするとともに, 評価結果が改善に活かされる様に努めている」と報告しており, そのために「各大学において, 積極的に記述して頂くことをお願いし

ている」とある。評価の目的の1つが「評価結果を各大学にフィードバックすることにより、各大学の教育研究活動等の改善に役立てること」であることと照らし合わせて、本分析によって解明された状況は、評価システムが有効に機能する前提条件が満たされている事を示しており、今後この状況が継続される事が望ましいと考えられる。

次に②について考える。評価結果の「改善を要する点」の指摘が、全体として自己評価に比べると、評価結果のほうが少ない事からは、「改善を要する点」については指摘を慎重に行った傾向が見て取れる。すなわち、短期間で修正が可能な事項は評価結果には記載しない傾向や、定量的な基準が定めにくい観点ではかなり明瞭な改善点しか指摘しない傾向が見られた。その一方で、基準3,4,8の観点等の数値的なものや、具体的に把握可能な取組に関しては、解釈のぶれがなく、統一性の高い評価が行われたことが示された。この事から、基準にもとづいて大学を定期的に評価し、信頼性の高い質の保証を行うためには、評価・分析の根拠となる指標の充実が望まれるとともに、基準5,6,9における教育の質の保証に本質的な定性的な質評価の観点についても、その判断基準の蓄積が重要と考えられる。

すでに、大学評価・学位授与機構では設置基準の判断に必要な定量的に判断可能なデータを、「大学現況票」[17]として提出する事を求めている。今後は、これらの客観的に把握可能な、質の保証に関連した指標等を特定して充実させ、それらをデータベース化して評価に用いる事により、評価作業の効率化が可能になるだろう。評価の客観性、ひいては信頼性を向上させるためには、基準や解釈の仕方についてより明確、具体的にすることを努力する一方で、評価分析の根拠となる指標やデータの充実が望まれる。さらには、教育の質の保証に本質的な定性的、質的な事項についての判断基準の蓄積の充実もまた望まれる。

以上、本稿が、今後の大学評価を検討する際の参考となれば幸いである。

謝辞

本分析におけるデータの集計について、大学評価・学位授与機構の評価企画国際課の井出隆係長に多大なご協力をいただきました。深く御礼申し

上げます。

文献

- [1] 学校教育法第109条第2項, <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S22/S22HO026.html>
- [2] 学校教育法施行令第40条, <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S28/S28SE340.html>
- [3] 川口昭彦 (大学評価・学位授与機構編集) (2006). 『大学評価文化の展開—わかりやすい大学評価の技法』大学評価・学位授与機構 大学評価シリーズ, ぎょうせい.
- [4] 館昭 (2005). 「国際的通用力を持つ大学評価システムの構築—「認証評価」制度の意義と課題—」『大学評価・学位研究』, 3, 5-19.
- [5] 館昭 (2005). 『改めて「大学制度とは何か」を問う』東信堂.
- [6] 基準の設定及び改善に関する規程, 大学評価ハンドブック2011 (平成23)年度申請大学用, 財団法人 大学基準協会.
- [7] 認証評価に関する調査研究 (平成18年度 文部科学省調査研究委託事業), 財団法人 日本高等教育評価機構, 平成19年3月.
- [8] 平成20年度に実施した大学機関別認証評価及び短期大学機関別認証評価に関する検証結果報告書, 独立行政法人 大学評価・学位授与機構, 平成22年1月.
- [9] 荻上紘一 (2009). 「認証評価制度の問題点とこれからの改革の方向」『大学評価研究』, 8, 43-51.
- [10] The Quality Assurance Agency for Higher Education (2008). “Outcomes from institutional audit published papers.” Linney Direct, Adamsway Mansfield. <http://www.qaa.ac.uk/reviews/institutionalaudit/outcomes/outcomes1.asp>
- [11] 野澤庸則・齊藤貴浩・林隆之・洪井進 (2010). 「高等専門学校機関別認証評価結果から見た高等専門学校の現状と認証評価の効果」『大学評価・学位研究』, 11, 3-28.
- [12] 洪井進, 井田正明 (2010). 「コミュニケーション研究の大学評価への応用」『電子情報通信学会技術研究報告』, 109, No.457, 15-16.
- [13] 大学機関別認証評価実施大綱 独立行政法人 大学評価・学位授与機構, 平成16年10月 (平

成19年12月改訂).

[14]自己評価実施要項 大学機関別認証評価 付選択的評価事項 独立行政法人大学評価・学位授与機構.

[15]大学評価基準 (機関別認証評価) 付選択的評価事項 独立行政法人大学評価・学位授与機構, 平成16年10月 (平成20年2月改訂).

[16]大学機関別認証評価 評価結果.

http://www.niad.ac.jp/n_hyouka/daigaku/hyouka/index.html

[17]大学現況票 (別紙様式) (自己評価書様式等) 平成23年度実施分 [大学機関別認証評価], http://www.niad.ac.jp/ICSFiles/afieldfile/2010/06/21/no6_1_1_genkyouikkatsu.xls

(受稿日 平成23年1月4日)

(受理日 平成23年1月25日)

参考資料

以下、参考資料として優れた点および、改善を要する点の、自己評価および、評価結果に記述さ

れた件数を、すでに、表3で示した基準3, 4, 5, 8以外について表3と同様の形式で示す。基準10については、評価結果の改善を要する点が通年で1件もなかったもので、省略している。

基準1

優れた点

観点番号	自己評価					評価結果						
	指摘数 合計	推移				指摘数 合計	推移					
		17年度	18年度	19年度	20年度		21年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
1-1-①	2	5	34	10	30	1	2	13	6	6		
1-1-②	0	1	0	0	7	0	0	1	0	0		
1-1-③	0	0	0	1	/	0	0	0	0	/		
1-2-①	4	5	22	8	32	4	3	5	2	6		
1-2-②	0	8	24	7	/	0	2	3	0	/		
合計	200	6	19	80	26	69	54	5	7	22	8	12

改善を要する点

観点番号	自己評価					評価結果						
	指摘数 合計	推移				指摘数 合計	推移					
		17年度	18年度	19年度	20年度		21年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
1-1-①	1	0	1	1	2	0	0	0	0	0		
1-1-②	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
1-1-③	0	0	0	0	/	0	0	0	0	/		
1-2-①	2	3	7	2	14	0	0	0	0	0		
1-2-②	1	2	7	4	/	0	0	1	0	/		
合計	47	4	5	15	7	16	1	0	0	1	0	0

基準2

優れた点

観点番号	自己評価					評価結果						
	指摘数 合計	推移				指摘数 合計	推移					
		17年度	18年度	19年度	20年度		21年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
2-1-①	40	3	2	14	6	15	15	1	1	8	1	4
2-1-②	0	0	0	26	4	33	3	0	5	0	13	
2-1-③	1	4	15	3	19	1	3	10	2	8		
2-1-④	1	1	0	0	1	2	2	0	1	0		
2-1-⑤	0	2	22	3	23	0	0	16	3	10		
2-1-⑥	0	0	/	/	/	0	0	/	/	/		
2-1-⑦	2	5	/	/	/	1	6	/	/	/		
2-2-①	17	1	1	7	1	7	2	1	0	0	1	0
2-2-②	39	1	4	13	7	14	7	0	0	4	1	2
その他	1			1								
合計	262	9	19	98	24	112	110	9	12	43	9	37

改善を要する点

観点番号	自己評価					評価結果						
	指摘数 合計	推移				指摘数 合計	推移					
		17年度	18年度	19年度	20年度		21年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
2-1-①	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
2-1-②	0	0	7	2	8	0	0	2	1	2		
2-1-③	0	1	3	2	1	0	1	1	0	0		
2-1-④	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0		
2-1-⑤	0	0	1	0	9	0	0	0	0	1		
2-1-⑥	0	0	/	/	/	0	0	/	/	/		
2-1-⑦	0	1	/	/	/	0	0	/	/	/		
2-2-①	3	0	0	2	0	1	1	0	0	1	0	0
2-2-②	9	0	1	2	0	6	0	0	0	0	0	0
その他	8		1	3	3	1						
合計	58	0	5	20	7	26	9	0	1	4	1	3

基準 6

優れた点

観点番号	自己評価						評価結果					
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
6-1-①	45	0	6	18	9	12	12	1	2	4	1	4
6-1-②	65	0	7	26	13	19	24	2	1	8	3	10
6-1-③	48	2	4	16	8	18	8	4	0	2	0	2
6-1-④	49	2	3	18	6	20	14	1	1	3	2	7
6-1-⑤	50	3	5	13	5	24	23	3	4	9	0	7
その他							1			1		
合計	257	7	25	91	41	93	82	11	8	27	6	30

改善を要する点

観点番号	自己評価						評価結果					
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
6-1-①	12	0	2	4	3	3	0	0	0	0	0	0
6-1-②	23	0	2	10	3	8	6	0	1	3	0	2
6-1-③	18	0	2	7	2	7	2	1	0	0	0	1
6-1-④	11	1	2	4	0	4	0	0	0	0	0	0
6-1-⑤	41	3	7	13	3	15	6	2	1	3	0	0
その他	4				1	3						
合計	109	4	15	38	12	40	14	3	2	6	0	3

基準 7

優れた点

観点番号	自己評価						評価結果					
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
7-1-①	26	1	3	11	3	8	3	2	0	1	0	0
7-1-②	61	3	3	20	7	28	24	4	2	7	1	10
7-1-③	25	1	3	15	6	0	14	0	2	9	3	0
7-1-④	19	0	0	1	0	18	9	0	0	0	0	9
7-1-⑤	19	1	3	15	0	0	12	1	1	9	1	0
7-2-①	34	2	3	12	5	12	16	0	2	7	1	6
7-2-②	34	0	4	11	1	18	22	0	1	11	0	10
7-3-①		1	8	27	2	39		1	2	10	1	19
7-3-②		1	1	14	4	20		0	0	6	4	9
7-3-③		1	1	14	0	27		1	0	8	2	13
7-3-④		1	1	17	6			1	0	12	4	
その他							1		1			
合計	403	12	30	157	34	170	194	10	11	80	17	76

改善を要する点

観点番号	自己評価						評価結果					
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
7-1-①	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7-1-②	11	1	0	2	1	7	1	0	1	0	0	0
7-1-③	10	0	4	5	1	0	0	0	0	0	0	0
7-1-④	8	0	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0
7-1-⑤	5	1	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0
7-2-①	16	0	6	4	2	4	5	0	2	2	0	1
7-2-②	12	2	2	5	1	2	1	0	0	1	0	0
7-3-①		0	4	3	1	7		0	0	0	1	1
7-3-②		0	3	1	1	6		0	5	0	0	1
7-3-③		0	1	5	3	9		0	0	0	0	0
7-3-④		1	2	4	0			0	0	2	0	
その他	3				2	1						
合計	116	5	23	30	14	44	17	0	8	5	1	3

基準9

優れた点

観点番号	自己評価						評価結果					
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
9-1-①	36	0	3	13	7	13	8	1	1	2	2	2
9-1-②		1	5	23	7	30		2	4	11	4	4
9-1-③	32	2	1	13	2	14	18	0	1	6	3	8
9-1-④		2	3	14	8	15		3	2	3	3	4
9-1-⑤		1	4	11	7	/		3	4	6	6	/
9-2-①		2	4	20	10	28		1	6	9	2	14
9-2-②		1	4	10	5	4		1	2	2	4	2
9-2-③		0	0	8	4	/		0	1	4	2	/
その他	2		1			1						
合計	301	9	25	112	50	105	135	11	21	43	26	34

改善を要する点

観点番号	自己評価						評価結果					
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
9-1-①	9	0	1	5	1	2	1	0	0	1	0	0
9-1-②		0	0	7	1	4		0	0	2	1	0
9-1-③	14	1	0	3	4	6	0	0	0	0	0	0
9-1-④		0	4	5	2	3		0	0	0	0	0
9-1-⑤		0	2	2	1	/		0	0	0	0	/
9-2-①		1	2	4	3	15		0	0	2	1	1
9-2-②		1	2	5	2	11		0	0	1	0	1
9-2-③		0	3	9	1	/		0	0	0	0	/
その他	2				2							
合計	115	3	14	40	17	41	10	0	0	6	2	2

基準10

優れた点

観点番号	自己評価						評価結果					
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
10-1-①	32	2	4	14	3	9	1	1	0	0	0	0
10-1-②	73	1	7	24	9	32	2	2	0	0	0	0
10-2-①	11	1	2	5	0	3	0	0	0	0	0	0
10-2-②	8	0	0	3	1	4	0	0	0	0	0	0
10-2-③	83	2	5	35	9	32	0	0	0	0	0	0
10-3-①	14	1	1	5	3	4	0	0	0	0	0	0
10-3-②	22	0	2	9	1	10	0	0	0	0	0	0
その他	3				3							
合計	246	7	21	95	29	94	3	3	0	0	0	0

改善を要する点

観点番号	自己評価					
	指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
10-1-①	3	0	1	2	0	0
10-1-②	23	0	3	3	3	14
10-2-①	3	0	0	2	0	1
10-2-②	3	0	0	1	2	0
10-2-③	11	0	3	4	1	3
10-3-①	6	1	1	2	0	2
10-3-②	6	2	1	3	0	0
その他	14		2	8	1	3
合計	69	3	11	25	7	23

基準11

優れた点

観点番号	自己評価						評価結果					
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
11-1-①	43	1	6	19	4	13	7	0	0	3	1	3
11-1-②	63	1	1	25	7	29	11	0	0	2	3	6
11-1-③	46	2	4	15	7	18	17	1	3	5	1	7
11-1-④	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
11-1-⑤	14	0	2	7	1	4	7	0	2	4	0	1
11-2-①	2	1	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0
11-2-②	23	1	3	10	1	8	5	0	1	2	0	2
11-3-①	42	2	4	14	3	19	8	1	0	2	0	5
11-3-②	14	1	2	3	1	7	1	1	0	0	0	0
11-3-③	20	1	3	4	2	10	4	0	0	0	1	3
11-3-④	16	0	0	4	0	12	12	1	1	1	1	8
合計	285	10	25	103	27	120	73	4	7	20	7	35

改善を要する点

観点番号	自己評価						評価結果					
	指摘数 合計	推移					指摘数 合計	推移				
		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度		17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
11-1-①	12	0	1	3	2	6	1	0	0	1	0	0
11-1-②	1	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0
11-1-③	2	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0
11-1-④	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
11-1-⑤	9	1	0	3	1	4	0	0	0	0	0	0
11-2-①	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
11-2-②	12	1	0	5	0	6	0	0	0	0	0	0
11-3-①	11	0	3	4	0	4	2	0	0	0	0	2
11-3-②	3	0	0	1	0	2	1	0	0	0	1	0
11-3-③	8	0	1	2	2	3	0	0	0	0	0	0
11-3-④	11	2	2	2	3	2	1	0	0	0	0	1
その他	4		1		1	2						
合計	73	4	8	22	9	30	6	0	1	1	1	3

[ABSTRACT]

An analysis of certified evaluation and accreditation of universities
by examining the relationship
between self-assessment reports and evaluation reports

SHIBUI Susumu *, NODA Ayaka *, TANAKA Yayoi *, NOZAWA Tsunenori **

This paper reviews Certified Evaluation and Accreditation of Universities performed by NIAD-UE. It is necessary to improve the evaluation system by examining data obtained from past evaluations. In this paper, we analyzed the relationship between self-assessments reports submitted by universities and evaluation reports reflecting evaluators' judgment. The numbers of "Good Practices" and "Needed Improvements" in each report from FY2005 to FY2009 were counted. The content of descriptions for each point was also analyzed. The results showed that the number of "Good Practices" and "Needed Improvements" in the self-assessment reports was higher than those in the evaluation reports as a whole. The difference in the proportion of "Good Practices" to "Needed Improvements" between the self-assessment reports and evaluation reports was also revealed. Some standards showed different tendencies. The characteristics of the evaluation were discussed based on these data.

* Associate Professor, Department of Research for University Evaluation, National Institution for Academic Degrees and University Evaluation

** Visiting Professor, Department of Research for University Evaluation, National Institution for Academic Degrees and University Evaluation